

『ラ・カリカチュール』

獨協大学図書館

展示期間：2012年6月4日（月）～7月28日（土）

2012年度オープン・カレッジ「ラ・カリカチュール—近代漫画の成立—（獨協大学図書館の貴重書紹介講座）」に関連して、春学期は第一期『ラ・カリカチュール』の資料を2週間毎に入れ替え、4回にわたり展示します。秋学期に第二期の資料の展示も予定しています。

■ 『ラ・カリカチュール』について

『ラ・カリカチュール』*La Caricature* は、小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac (1799-1850) の発案のもと、画家・ジャーナリスト・出版者であるシャルル・フィリポン Charles Philipon (1800-1862) を発行責任者とし刊行された。この風刺週刊紙は、1号につき文章4ページとリトグラフ(石版画)原則2枚からなり、発行年代により第一期と第二期にわけられる。

第一期『ラ・カリカチュール』は1830年11月から1835年8月にかけて発行された。内容の多くがフランスの政治風刺であったため、フィリポンは政治的『ラ・カリカチュール』*La Caricature politique* と呼んだ。一方、1838年11月から1843年12月にかけて発行された第二期『ラ・カリカチュール』はフランス風俗風刺という内容から非政治的『ラ・カリカチュール』*La Caricature non politique* もしくは臨時『ラ・カリカチュールとその続き』*La Caricature provisoire et sa suite* と呼ぶことがある。

第一期『ラ・カリカチュール』の発行は1830年の七月革命により復古王政が打倒されてから間もなくのことであり、そのことは『ラ・カリカチュール』が「言論の自由」を体現していたことを意味する。しかし、市民王ルイ・フィリップ Louis Philippe (1773-1850) が保守に走るにつれ、『ラ・カリカチュール』の政治風刺も辛辣さを増し、政府はいつの間にか検閲を復活させ、『ラ・カリカチュール』に対して高額な保証金を要求、また訴訟の末にフィリポンを9ヶ月も拘禁し、巨額な罰金を科した。最終的に、1835年9月の検閲法(いわゆる九月法)が成立する直前に第一期『ラ・カリカチュール』は廃刊に追い込まれた。

九月法は、洋梨としてルイ・フィリップを描いた『ラ・カリカチュール』の権力者に対する個人攻撃をうけ、「出版物において意見を述べることは許すが、絵によって代弁させた意見が何らかの行為に変わることを禁止」したのである。しかし、フィリポンは『ラ・カリカチュール』の兄弟日刊紙『シャリバリ』*Le Charivari* において、時事問題という切り口で国内外の出来事を描くことで検閲を逃れながら風刺紙の出版を続けた。

そして、1838年11月に第二期『ラ・カリカチュール』が風俗風刺画を掲載しながら試験的に発行され、1839年7月には完全に復活した。これら第二期の号にはバルザックの『人間喜劇』を彷彿とさせるような傑作がいくつも掲載されている。『ラ・カリカチュール』の意図は一流作家の文章に別刷りの美しい石版画を添えるというもので、多くは彩色され、そのすべてが手彩色である。一方他紙は安いモノクロの木版画で対抗するようになった。

さらに、政治風刺の棘を抜かれた『ラ・カリカチュール』は広告を資金源とする廉売競争にも敗北し、1843年には『シャリバリ』に吸収合併され廃刊となった。

第一期『ラ・カリカチュール』は日本国内数箇所にも原本があり、復刻本も存在するが、第二期『ラ・カリカチュール』の復刻本はなく、原本所蔵も少なく貴重な資料である。

解説指導：伊藤幸次 獨協大学名誉教授

参考文献

1. ジュディス・ウェクスラー著、高山宏訳『人間喜劇：十九世紀パリの観相術とカリカチュア』、東京、ありな書房、1987。請求番号：726.1-W52
2. 石子順著『カリカチュアの近代：7人のヨーロッパ風刺画家』、東京、柏書房、1993。請求番号：726.1-I763c
3. 高橋憲夫、石塚正英編『風刺図像(カリカチュア)のヨーロッパ史：フックス版』、東京、柏書房、1994.7。請求番号：726.1-F51
4. 町田市立国際版画美術館編集『ラ・カリカチュール：王に挑んだ新聞』、町田、町田市立国際版画美術館、2003.4。請求番号：726.1-L12

■ 展示期間、および展示作品リスト

第1回 6月4日(月)～6月16日(土)

1. A.G. ドゥカン画「さらし者にされる自由の女神 (La Liberté au poteau)」、第13号(1831年1月27日)、リトグラフ版画番号26。

それまで風俗風刺画が中心だった『ラ・カリカチュール』に掲載された最初の政治批判画。「処刑柱に縛られ、焼き印を押されようとしている女性はフランソワーズ・リベルテ。『フランス』と『自由 liberté』に由来する名をもつ『自由の女神(象徴)』である。(参考文献4、p.51より引用)
2. グランヴィル画「政治の養禽場 (La basse-cour politique)」、第45号(1831年9月8日)、リトグラフ版画番号90 & 91、手彩色。

左端の太鼓腹の農夫がこの庭の主国王ルイ・フィリップ。中央の鷺鳥の一方がけたたましい声で知られた王妃であろう。右方の一団は内閣の各大臣を表し、右端の犬はロボ男爵。彼はルイ・フィリップの忠実な番犬であり、今後重要な人物となってゆく。グランヴィルの「行列もの」として知られるこの種の作品の解説には、当時の政情についての詳細な知識が必要である。

第2回 6月18日(月)～6月30日(土)

3. C. フィリポン画「重罪院の法廷で描かれた洋梨のスケッチ (Croquades de Poires faites à la cour d'assises, audience de 14 novembre 1831)」、第55号(1831年11月14日)、号外。

フィリポンは法廷でこの素描を描き、「王に対する名誉棄損」と「擬人化された権力」の違いを主張した。結局有罪判決を受けたが、身体的特徴をよく捉えた「洋梨」は、以後ルイ・フィリップの代用として『ラ・カリカチュール』に頻出し、遂には子どもたちの落書きにまで描かれたという。
4. H. ドーミエ画「ペトー王の宮廷 (La Cour du Roi Pétaud)」、第94号(1832年8月23日)、リトグラフ版画番号192-193、手彩色。

ペトー王(=ルイ・フィリップ)と謁見を求める人々(=七月王政の大臣たち)。「ペトー王は乞食が選んだという伝説上の人物。『ペトー王の宮廷』といえば、皆が支配者になろうとして混乱をきわめている集まりのこと」。(参考文献4、p.94引用)国王やその表象を直接風刺画に描くと不敬罪になるため、王も玉座も王冠も描かれず、王の足だけが描かれている。

第3回 7月2日(月)～7月14日(土)

5. H. ドーミエ画「薬剤師の総司令官たる将軍ランスロ・ド・トリカニユル公の、貴族院入場の行列 (Cortège du commandant-général des Apothicaires, le prince Lancelot de Tricanule, à son

entrée dans la Chambre des Pairs)」、第 143 号(1833 年 8 月 1 日)、リトグラフ版画番号 299-300、手彩色。

貴族院議員となったロボ男爵を風刺。彼は元ナポレオン帝政下の将軍。七月王政では自由派のラ・ファイエットの後任として国民衛兵総司令官。1831 年元帥、1833 年貴族院議員。共和派デモを消火ポンプで鎮圧したことから「浣腸器」がトレードマーク。題のランスロは「水をかける」、トリカニユルは「浣腸器三本」の意。モリエールの喜劇『病は気から』から着想されている。

6. H. ドーミエ画「まず瀉血、次に下剤、その後浣腸 (Primo saignare, deinde purgare, postea clysterium donare)」、第 161 号 (1833 年 12 月 5 日)、リトグラフ版画番号 337-338、手彩色。

モリエールの喜劇『病は気から』のもじり。フロック・コートにシルク・ハットのブルジョワ (=王、親しみを演出するため蝙蝠傘を持ち、矢鱈と握手して回った) が怪我人に当時内科的療法の一つであった瀉血で応急処置を試みている。血を抜かれる怪我人は、搾取される人民。傍に王の副官シモン・ベルナルが洋梨型の下剤壺をもち、ロボ男爵は浣腸器をもって控えている。政府系の新聞は医術の心得のあるルイ・フィリップの美談として報道した事件だが、実際の治療効果は無かったろう。

第 4 回 7 月 17 日 (火) ~7 月 28 日 (土)

7. グランヴィル画「自由の女神征伐のための第十軍 (第五図) (Grande Croisade contre la Liberté (5e feuille))」、第 192 号 (1834 年 7 月 10 日)、リトグラフ版画番号 402-403、手彩色。

全 7 図中第 5 番目。左は詩人・政治家で理想主義者のラマルティエヌ。1832 年以来『東方紀行』を執筆。1833 年代議士。彼の理想の言葉が書かれた船で東方へ。白鳥とキューピッドの付いた船体は愛の女神ヴィーナスの象徴帆立具。彼は 1848 年の二月革命で臨時政府の総統となるが、実務能力皆無のため 3 ヶ月で失脚。右は高貴な家畜小屋 (=貴族院) に住まう王と大臣。ギロチンを囲み高貴なおまるで戦場へ。居眠りしている御者 (杖を突いている骸骨も) は老首相スールト元帥。引いているモグラ、亀、ザリガニも高齢化。亀の甲、車軸など洋梨 (=ルイ・フィリップ) のモチーフにも注意。

8. H. ドーミエ画「俺たち、命を捨てた甲斐があったもんだ! (C'était vraiment bien la peine de nous faire tuer!)」、第 251 号 (1835 年 8 月 27 日)、リトグラフ版画番号 524。

第一期『ラ・カリカチュール』最後のリトグラフ。七月革命の「栄光の三日間」で亡くなった死者たちが墓石を持ち上げ、打倒した復古王政から得たはずの「自由」の結末に幻滅を隠せないでいる。過激な政治批判のため、直後発布される予定の検閲法 = 別名九月法で発売禁止が確実となった、第一期『ラ・カリカチュール』はこの号で幕を閉じる。彩色はないが、大変美しいリトグラフである。